

はじめに … 十勝内陸部、人と川との「つながり」の移り変わり

「治水」とは、洪水から暮らしを守ること、
「利水」とは、川の水を暮らしに役立てることで。



漁・狩猟・採集・交易



農業・林業中心



農業・林業・工業・商業



うるおいある暮らしへ

川から命や暮らしを守る

小高いところに暮らす

低い平地も田畑に
↓
洪水におそわれる
↓
湿地が多い
↓
水を早く流すように
土地がけずられないように
水はけを良く

治水

食糧増産
産業発展
人口増加
↓
使える土地を増やす
できた土地を守る
山の土石流を防ぐ

治水

豊かになった暮らし
↓
土地・作物・住宅・産業を守る

治水

川を暮らしに生かす

魚をとる
水をくむ
舟の通る「道」として

自然とともに

魚をとる・サケを増やす
水をくむ
舟の通る「道」として
木材流送・農業用水
↓
せきを造り水を引く

利水

サケを増やす
上水道を引く
農・工業用水、水力発電
↓
せき、ダム、水路
浄水場、発電所

利水

サケを増やす
上・下水道を広い範囲に
農・工業用水、水力発電
↓
せき、ダム、水路
浄水場、下水処理場、発電所

利水

自然との
かかわり

自然の中で
めぐみを受けて

自然とのたたかい

自然を人に合わせる

豊かだが、自然が少なくなった暮らし
↓
川での楽しみや自然のことも考える

環境保全

川のできごと

寛政元年(1789) 十勝川不漁、餓死者多数
寛政12年(1800) 皆川周太夫、大津から十勝川を遡り、今の清水町から日高へ
安政5年(1858) 松浦武四郎、石狩から山越え、十勝川・大津、歴舟川・札内川・十勝川・浦幌太

明治16年(1883) 晩成社帯広入植、サケ禁漁
明治29年(1896) 河川法制定(治水中心)
明治31年(1898) 十勝川大洪水
明治32年(1899) 帯広ふ化場でサケ人工ふ化
大正11年(1922) 十勝川大洪水
昭和3年(1928) 統内新水路工事始まる
昭和10年(1935) 千代田堰堤(1段)完成

昭和12年(1937) 統内新水路通水
昭和29年(1954) 洞爺丸台風 日高山系などの森林被害
昭和30年(1955) 糠平系発電所より送電開始
昭和32年(1957) 帯広市稲田浄水場
昭和37年(1962) 台風9号 死者・行方不明者4名
昭和39年(1964) 河川法改正(治水と利水)
昭和47年(1972) 札内川・戸島別川 直轄砂防事業着手

昭和56年(1981) 大雨 死者1名
昭和60年(1985) 十勝ダム完成
平成4年(1992) 十勝川温泉前に、白鳥護岸完成
平成4年(1992) 国道336号の旅来渡船廃止
平成8年(1996) 札内川ダム完成
平成9年(1997) 河川法改正(治水と利水と環境)
平成19年(2007) 千代田新水路完成

参考：「帯広市史・平成15年編」帯広市市史編纂委員会、帯広市、2003 「十勝大百科事典」十勝大百科事典刊行会、北海道新聞社、1993

参考：「十勝川・写真で綴る変遷」帯広開発建設部、『十勝川・写真で綴る変遷』企画編集委員会、(財)河川環境管理財団、1993

※1 内陸開拓前(ないりくかいたくまえ)：十勝の大部分には先住民としてアイヌ民族が暮らしていた。1855の調査では海沿いに509人、内陸に812人だといふ。ただ交易や漁場、支配の拠点として、海沿いに和人が入っていて、大津などはかなり栄えた。また、明治

13年から音更川沿いに住んでいた和人もいる。
※2 漁・狩猟・採集・交易(りょう・しゅりょう・さいしゅう・こうえき)：十勝のアイヌ民族は、これらを中心としていたが、粟(あわ)や稗(ひえ)の栽培もしていた。

※3 皆川周太夫(みながわしゅうだゆう)：寛政11年、江戸幕府の命により十勝・日高・胆振・石狩を踏査。旧帯広川に「上陸地」が文化財として示されている。
※4 松浦武四郎(まつうらたけしろう)：1818～1888。江戸末期の探検家。放浪生活を送り、

後に幕府や開拓使に仕え、北海道調査を6回行った。「北海道」の命名者でもある。
※5 晩成社(ばんせいしゃ)：北海道開拓を目的とした農事会社。下帯広村(今の帯広市)に明治16年(1883)入植した。幹部は依田勉三、鈴木統太郎、渡辺勝の3氏。

川で行われた大きな工事

川につながる
ふだんの暮らし

川につながる農業

川につながる漁業や工業

付録

付録